

ジェイル・ブレイカー

2005(平成17)年6月26日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督=キム・サンジン/脚本=パク・チョンウ/原案=キム・ヒュンジュン/撮影=チョン・グァンソク/出演=ソル・ギョング/チャ・スンウォン/ソン・ユナ/ユ・ヘジン/カン・ソンジン (エスピーオー配給/2002年韓国映画/121分)

……脱獄をテーマとした名作はスティーブ・マックィーン主演の『パピヨン』だが、これは2人の主人公による韓国版『パピヨン』の喜劇編……？ やっとの思いで脱獄を成功させた2人の主人公が見たのは、8月15日の光復節の特赦名簿にある自分たちの名前。これは一体……？ 2人はまた刑務所に戻るのだろうか？ さらに、やっと再会できた婚約者は今……？ 脱獄を成功させた2人とそれに絡む婚約者たち、そして刑務所内での暴動をハイライトとするドタバタ劇は、みんなが真剣なだけにブラックユーモア満載の最高に面白い喜劇となっている。それにしても、この映画の登場人物たちはみんなそれぞれに自己主張が強く、大声で怒鳴ってばかり……。これってやはり韓国人気質……？

これは韓国版の喜劇『パピヨン』！

「脱獄モノ」の最高傑作は集団版(?)では『大脱走』(63年)だが、個人版(?)ではスティーブ・マックィーン主演の『パピヨン』(73年)。この『ジェイル・ブレイカー』は韓国版の脱獄モノで、その主人公は2人。1人はパンを盗んだだけで実刑判決を受けたチェ・ムソク(チャ・スンウォン)。彼は何度も脱獄に失敗したが、ある日偶然入手した1本のスプーンで6年間も穴を掘り続け、遂に……。

もう1人は詐欺師のユ・ジェピル(ソル・ギョング)。「塀の外」でずっと待っていてくれるはずの恋人のハン・ギョスン(ソン・ユナ)から、面会の時に「も

う待つてられない。新しい恋人と結婚するの」と言われたため、大ショック。そこで、何が何でもムソクとともに脱獄を執行！ 脱獄に至るまでの刑務所内での看守と囚人との力関係や、囚人同士の派閥関係など、見どころがいっぱい。

8月15日の光復節特赦

脱獄に成功し、服を盗みタクシーを乗っ取った2人だったが、ムソクの目標はただ脱獄することのみ。したがって、それに成功すると、あとは何もすることなし……。

これに対してジェピルはタクシーをぶっ飛ばして一路ギョスンのもとに。しかしその途中で見た新聞には、8月15日の光復節における特赦の記事に自分たちの名前が。これは一体何なんだ……！ あと一日決行を延ばしていれば、脱獄せずとも特赦によって無事に塀の外へ出てくることのできたのに……？

新しい彼氏は警察官

ギョスンは明日の結婚式のため、花嫁衣装のドレスの試着を彼氏とともに。そこにジェピルが乗り込んできたから、さあ大変！ 新恋人は警察官だったから、拳銃を抜いてジェピルを取り押さえたが、ギョスンから「昔の恋人」と聞くと、「お前、俺がはじめての男と言ったじゃないか」と新たな波紋が……？ 1人の美女ギョスンをめぐるジェピルと警察官の2人の対決は結構面白いが、そこで目立つ(?)のはギョスンのしたたかさ。自分に都合の悪い話が出てきても、決してそれに滅入ることなく直ちにそれに反論。

この3人の痴話ゲンカをみていると、韓国人の自己主張の強さに唖然としてしまうが……？

刑務所内の官僚たち！

刑務所内には保安部長、警備部長など数々の役職の「官僚」たちがいるが、刑務所で1番エライ人はもちろん所長。しかし、刑務所に国会議員の先生たちが視察に来るとなると、話は別。

いつもエラそうにしていた所長も、彼らにはベコベコしてゴマをすることしか

考えてないし、とにかく視察をソツなくこなすことで頭がいっぱい。ところが、そんな時に限って、ムソクとジェピルの脱獄という大事件が発生したが、幹部たちはこれを所長に内緒にしたまま。そしてムソクとジェピルからかかってきた電話に対して、「とにかく帰ってこい」「帰ってきたらすべて無かったことにして特赦してやる！」「俺たちのクビを賭けて約束する」と叫ぶ刑務所内の幹部たちの言葉を、2人は信用するのだろうか……？

大暴動に見る人間の本性

国会議員の視察を受け(?) たために苛酷な強制労働を課した所長たちに対して、囚人たちの不満が一気に噴出し、大暴動に発展した。ホースによる一斉放水が途切れたところを逆襲に出た囚人たちは一気に銃を奪って、刑務官たちを制圧。これによって、刑務所の所長以下はもちろん、国会議員たちも、いつぶっ殺されるかわからないという状況に……。そこで見せる、彼ら「権力者たち」の本性は実に面白い……。

韓国では、大統領が代わると前の大統領はボロクソに叩かれ、下手をすると逮捕されることさえあるが、韓国の政治家たちの主張が時として180度急変する(?) のも、この映画を観ているとなるほどよくわかる……？

あらためて感じる自己主張の強さ！

この映画は最初から観客を笑わせようと狙って、ギャグを連発しているわけではない。したがって、決して本来の喜劇映画ではなく、登場人物たちはみんなそれぞれの場面では真剣そのもの……。

必死の形相で自分のすべきことをやろうとしているし、そのための自己主張をみんなが展開している。ギョスンをめぐるジェピルと警察官の確執や、刑務所内での権力闘争(?) もナマナマしく迫力がある。そのため、セリフはきわめて大声、というより怒鳴ってばかりという状況。なるほどこれが韓国人の気質なのかと痛感させられるが、これだけみんなが大声で自己主張し続けるのを観ているのは結構しんどいもの……？

2005(平成17)年6月27日記